

## 審査の結果の要旨

氏名 陳 娜

色と形は視覚モダリティの中で独立していると考えられていたが、近年において共感的な連合に類似するような現象が積み重ねられて来た。本論文では、顕在的・潜在的な色と形状の連合とその選好への影響を調べ、そのような連合を起こす意味論的な軸を抽出し議論を行っている。

第1章は序章とし、色と形状の対応を扱う動機と背景が述べられている。カンディンスキーの連合理論を導入として、その後様々な研究が行われてきたものの、異なる色と形状の対応も示されている。これらの対応は環境などを含んだ学習経験から生じていることが示唆されている一方で、なぜ人がこれらの対応を確立できるのかに関しては現在も分かっていない。本論文では、色と形状との対応について検討することで、その普遍性と内在するメカニズムを明らかにすることを目的としている。

第2章では、イタリア人における色と形状との対応を調べた先行研究の結果を踏まえて、日本人における色と形状との対応について検討している。実験1では、日本人の対応がイタリア人を対象にした先行研究の結果と類似したものであることが示されている。実験2では、実験1で得られた色と形状との対応は、色と形状に共通した「暖かさ」の軸によって解釈できることを示す結果を得て、意味的情報の一致が色と形状との対応を形成しているという仮説を立てている。

第3章では、潜在的連合テストを採用することで、実験1において確認された色と形状との対応が行動に影響を与え得るかを検証している。カンディンスキーの提案する色と形状との対応は部分的にしか検証されず（実験3）、実験1で見いだされた色と形状の組み合わせ（実験4）では、すべての色と形状の対応が検証され、反応時間に影響を及ぼすことを確認している。これらの結果は、色と形状の対応が安定で頑健であることを示しており、認知的処理と行動の両方に影響を与えことを示している。

第4章では、聴覚体験の違いが同一モダリティで処理される色と形状の対応に与える影響を調べるため、聴覚障害者における色と形状との対応について検討している。聴覚障害者と健聴者に対して質問紙実験を行い、聴覚障害者は健聴者と類似した色と形状の対応を持っていることを示唆する結果を得た（実験5）後、実験6で潜在的連合テストを用いて、聴覚障害者の色と形状の対応の強度を検討している。その結果、聴覚障害者の色と形状の対応は健聴者に比べて弱い傾向にあることが分かり、聴覚経験が色と形状との対応に影響する可能性がある」と述べている。

第5章では、意味論的な軸による連合が、色と形状の選好に影響を与える

可能性を調べる為に、個人差の観点から色と形状の好みについて検討し(実験 6)、特定の色味を好む人は特定の形状を好む傾向があることが明らかとなった。これらの結果は、色と形状の好みが互いに関係していることを示唆しており、色と形状に共通する意味的情報が、色と形状の好みの関係性に影響している可能性を示唆している。

第 6 章では、第 2 章から第 5 章までの知見をまとめ、色と形状に共通する意味的情報の一致が、色と形状の連合や好みの関係性に繋がっている可能性を提案し、刺激の意味的な情報は感覚経験を互いに結び合わせる役割を担っているという仮説を立てた上で、今後の展開を議論している。

本論文は、色と形に関して特定の連合が存在することをして実験心理学的に日本人を被験者として確認することで、その普遍性と個人差を明らかにしている。感覚間の共感的な連合と同様に、①視覚モダリティ内での色と形の連合においても意味論的な軸が文化によらず存在しうることを示し、②そのような連合が顕在的な連合だけでなく潜在的な連合としても現れること、③聴覚に障害をもつ被験者と健聴者では共通する部分と異なる部分があることなどを示したところに新規性がある。本論文で見いだされた知見は、視覚経験に対する過去の感覚経験の影響や意味論的な連合の重要性を明らかにしている点が評価でき、学術的意義も高い。

よって本論文は博士(学術)の学位請求論文として合格と認められる。